

病害虫発生予報 第8号(11月予報)

和歌山県農作物病害虫防除所

＜予報の概要＞

作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
エンドウ	褐斑病、褐紋病 うどんこ病 つる枯細菌病 ハダニ類 ウラナミシジミ	並 並 やや多 やや少 並	野菜・花 き全般	シロイチモジヨトウ ハスモンヨトウ オオタバコガ	やや少 やや少 やや少
ハクサイ キャベツ	黒斑細菌病 アブラムシ類 コナガ ヨトウガ	並 やや少 並 並	カンキツ	果実腐敗病 ミカンハダニ	やや少 やや少
			果樹全般	カメムシ類	やや少

気象予報

1か月予報（予報期間10月26日～11月25日 大阪管区气象台）

＜特に注意を要する事項＞

期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みです。

＜予想される向こう1か月の天候＞

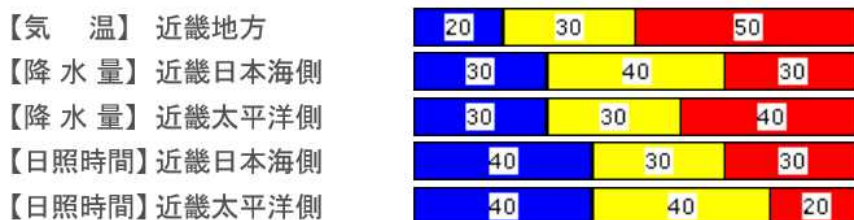
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

近畿日本海側では、期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。近畿太平洋側では、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。日照時間は、近畿太平洋側で平年並または少ない確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞



凡例： ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

11月	月平均気温（平年値） （℃）		月降水量（平年値） （mm）	
	和歌山	13.5	和歌山	90.5
潮岬	15.3	潮岬	160.2	

I. 野菜・花き

<エンドウ>

1. 褐斑病、褐紋病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における10月中旬の発生ほ場率は13%（平成15%）、発病葉率は0.2%（平成0.5%）であった。

② 11月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多湿ほ場で発生しやすいので、排水を良くする。

② 施設栽培では、降雨が多いと予想される場合は早めにビニル被覆を行う。

③ 薬剤の予防散布に努める。

④ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における10月中旬の発生ほ場率は0%（平成5%）であった。

② 11月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 施設栽培では、低温期でも乾燥すると発生しやすい。

② 下位葉に病斑を認めたら薬剤散布を行う。

3. つる枯細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における10月中旬の発生ほ場率は13%（平成2%）であった。

② 11月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 本病は、褐斑病、褐紋病と葉の病斑が似ているので注意する。褐斑病、褐紋病の病斑は日光に透かしても不透明であるのに対し、本病は光が透けて見えることで区別できる。

② 防風ネットは予防効果が高い。

③ 種子伝染するので、発生ほ場では採種しない。

4. ハダニ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における10月中旬の発生ほ場率は13%（平成32%）、生息株率は10.7%（平成13.1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

5. ウラナミシジミ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培における10月中旬の被害発生ほ場率は55%（平成50%）、被害株率は18.2%（平成18.9%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 食入加害されたさやは、ほ場の外に持ち出し処分する。
- ② 主な産卵部位である花や蕾に薬液が十分かかるよう、7～10日間隔で防除を行う。

<ハクサイ、キャベツ>

1. 黒斑細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のハクサイ、キャベツにおける10月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（平年：ハクサイ8%、キャベツ6%）であった。
- ② 11月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 降雨前に薬剤を予防散布する。

2. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のキャベツにおける10月中旬のモモアカアブラムシの発生ほ場率は25%（平年24%）、生息株率は1.9%（平年3.2%）であった。ニセダイコンアブラムシの発生ほ場率は13%（平年45%）、生息株率は0.6%（平年10.5%）であった。
- ② 黄色水盤（紀の川市）への10月1～20日の飛来数は、15頭（平年42.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤散布にあたっては薬液が株元の葉裏に十分かかるように行う。

3. コナガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のキャベツにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率9%、10株あたり生息密度0.1頭）であった。
- ② フェロモントラップによる10月1～20日の誘殺数は、和歌山市78頭（過去7年の平均58.0頭）、紀の川市0頭（平年0.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

4. ヨトウガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のキャベツにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率7%、生息株率0.9%）であった。
- ② フェロモントラップによる10月1～20日の誘殺数は、紀の川市15頭（平年5.9頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生初期の若齢幼虫の防除に努める。

<野菜・花き全般>

1. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部のキャベツにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率8%、生息株率0.5%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培エンドウにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率17%、生息株率2.9%）であった。
 - ③ フェロモントラップによる10月1～20日の誘殺数は、紀の川市13頭（平成14.0頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 幼虫が中～老齢期になると薬剤感受性が著しく低下するので、若齢期（ふ化幼虫の集団の食害による白変葉がみられたとき）の防除を心がける。
 - ② 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

2. ハスモンヨトウ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部のキャベツにおける10月中旬の発生ほ場率は13%（平成14%）、生息株率は1.3%（平成1.3%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培エンドウにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率27%、生息株率5.9%）であった。
 - ③ フェロモントラップによる10月1～20日の誘殺数は、和歌山市1,121頭（過去8年の平均1,656頭）、紀の川市200頭（平成922頭）、御坊市550頭（平成1,979頭）、印南町435頭（平成827頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① シロイチモジヨトウに準ずる。

3. オオタバコガ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部のキャベツにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（過去8年の平均：発生ほ場率6%、生息株率0.3%）であった。
 - ② 県中部の露地栽培エンドウにおける10月中旬の発生ほ場率は0%（平成：発生ほ場率28%、生息株率5.6%）であった。
 - ③ フェロモントラップによる10月1～20日の誘殺数は、紀の川市40頭（平成26.1頭）、御坊市3頭（平成32.0頭）、印南町33頭（平成16.8頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 中～老齢幼虫に対する薬剤の防除効果は低いので、若齢幼虫期に防除するよう努める。

II. 果 樹

<カンキツ>

1. 果実腐敗病（緑かび病、青かび病）

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における10月中旬のウンシュウミカン樹上果実の緑かび病発生圃率は3%（平成20%）であった。
 - ② 11月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 樹上の発病果や、これに接触している果実は速やかに除去する。
 - ② 果実はていねいに取り扱い、果面に傷をつけない。

- ③ 収穫前の薬剤散布を励行する。

2. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における10月中旬の発生圃率は9%（平成11%）、発生葉率は0.7%（平成3.5%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 収穫前の薬剤散布は使用基準に特に留意する。
② 収穫時期まで袋かけを行う品種では袋かけ前に発生状況を確認し、必要に応じて薬剤散布を行う。

< 果樹全般 >

1. カメモシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 県北部における10月中旬のカキの被害果率は「富有」で3.3%（平成10.9%）であった。
② 紀の川市粉河の予察灯による10月中旬の誘殺数はチャバネアオカメモシ10頭（平成13頭）、ツヤアオカメモシ59頭（平成71頭）であった。
③ 有田川町奥の予察灯による10月中旬の誘殺数はチャバネアオカメモシ7頭（過去5年の平均19頭）、ツヤアオカメモシ139頭（同141頭）であった。
④ みなべ町東本庄の予察灯による10月中旬の誘殺数はチャバネアオカメモシ11頭（過去9年の平均101頭）、ツヤアオカメモシ1,607頭（同1,377頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 園内外のカメモシ類の発生と果実被害の状況を常に観察する。
② 飛来がみられる園で薬剤散布する場合は、収穫期の散布となるので使用基準に十分注意する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所>

<https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780